

環境を視点とした地域教材の開発 (2)

—小中高の関連を踏まえた地域教材授業実践—

金子 遥^{*1}・東 俊克^{*2}

Developing Local Teaching Materials from an Environmental Perspective —Relations Between Elementary, Junior High and High Schools—

Haruka KANEKO, Toshikatsu HIGASHI

抄 録:本研究は、市民性教育という観点から、学習指導要領における小中高の地域学習について、その特質や課題点を明らかにし、授業開発を行った。小中高の関連から見られた課題を基に、人権を視点に自ら調査テーマを決め、仮説を設定し、仮説検証という形で発表し、質疑応答を行う中学校社会科地理的分野の単元を実践した。その結果、アンケートや成果物の中から、認識の深まりや多面的・多角的な考察を見取ることができた。

キーワード:地理的分野, 市民性教育, 地域学習, 小中高, カリキュラム

I. 研究の目的

本研究は、現行の学習指導要領で示された「地域学習」を小中高の関連性と発達段階に着目して分析し、授業を開発した。さらに、実践した結果をアンケート等から、市民性教育という観点から考察した。

高等学校の科目改編に伴い、「地理総合」が新設されるなど地理教育の重要性が増している。しかし、小中高で地理教育（社会科・地理歴史科）が必修化されたことに伴い、内容の重複に注意する必要がある。特に地域学習は、小学校3年・4年社会科、中学校社会科地理的分野、高等学校地理歴史科地理総合で内容に示されており、関連性と発達段階を踏まえたカリキュラムの開発が望まれる。筆者は、学習指導要領から地域学習における系統性を分析し、授業開発を行った（金子2022）。そこで、実際に授業実践を行い、その結果から、市民性教育という観点で考察していく。まず、学習指導要領における小中高の地域学習について、その特質や課題点を明らかにする（Ⅱ）。そして、授業開発・実践を行い（Ⅲ）、最後に、市民性教育という観点から実践を考察する（Ⅳ）。

Ⅱ. 市民性教育と小中高の地域学習

本章では、市民性教育の整理と学習指導要領の分析を行う。

^{*1} 中野区立明和中学校

^{*2} 京都教育大学大学院連合教職実践研究科

2.1 市民性教育としての防災教育

金子（2022）は、小中高の系統性を意識した地域学習を示し、「防災」を視点として授業開発を行った。地域学習の特質として、身近な「社会」であるために学習者自身に関わりやすいという点と、身近な自治体であるために具体的な政策に興味関心をもちやすいといった点が挙げられる。これらの点に対して防災は、「自助・共助・公助」といった個人の責任で行う対策と自治体の責任で行う対策の両者が出てくる点で、地域学習との親和性が高いといえる。

紙田（2021）は、市民性教育という視点から、近年の防災学習について5つの研究を挙げ、「目的・対象・方法」で整理した。これらの違いを「自助、共助を強調する政策を所与のものとして、その枠組みの中で防災のための資質・能力を身に付けさせようとするもの」と「個人の責務としての防災能力だけではなく、その前提である防災政策の在り方そのものを分析、検討する」ものとして分析した。つまり、これまでの防災学習が「自助・共助」を強調した個人の責任や義務に目が向けられ、自助が難しい人々や共助が不可能な限界集落に向けた政策など、自助・共助・公助の在り方を再構築するような防災学習の必要性を示した。

2.2 学習指導要領の地域学習における小中高の関連性

金子ほか（2022）では、学習指導要領における「地域学習」を以下のように整理し、説明した（表1）。

表1 地域学習を取り扱う学習指導要領の分析（金子ほか2022）

	小3	小4	中学校	高等学校
主な学習活動	市に対する理解	人々の災害に対する活動	地域独自の主題設定とその手法	地域の課題解決
理解	地域や市の様子	災害に対する対処や備え	地理的なまとめ方の基礎	解決に向けた取り組み
技術（資料）	地図	地図や年表	地形図や主題図	探究の方法
考察表現	場所による違い	人々を守る活動とその働き	主題や調査のまとめとなるような手法や結果	課題解決に求められる取り組み

小学校3年生では、主に地域や市の様子の理解を行い、資料としては地図を用いて、場所による違いを考察し表現しようとしていることが分かる。つまり、市に対する理解が主な学習活動といえる。小学校4年生では、主に災害に対する対処や備えの理解を行い、資料としては地図や年表を用いて、人々を守る活動とその働きを考察し表現しようとしていることが分かる。つまり、人々の災害に対する活動が主な学習活動といえる。中学校地理的分野では、主に地理的なまとめ方の基礎の理解を行い、資料としては地形図や主題図を用いて、主題や調査のまとめとなるような手法や結果を考察し表現しようとしていることが分かる。つまり、地域独自の主題設定とその手法が主な学習活動といえる。中学校社会科地理的分野では、小学校3年生で身に付けた市に対する理解や小学校4年生で身に付けた人々の災害に対する活動の学習を生かし、高等学校の地理総合での課題解決に対する学習に繋げることが読み取れる。つまり、静態地誌的に市について理解した小学校での学習を生かして、課題解決に向けた学習の前段階として中学校社会科地理的分

野が位置づけられていることが分かる。そして、中学校の学習指導要領では、主題の例として、「学校周辺の地域で、人々が自然災害から身を守るにはどうしたらよいか」が挙げられていることから、課題に対する仮説を設定した学習が特質といえる。

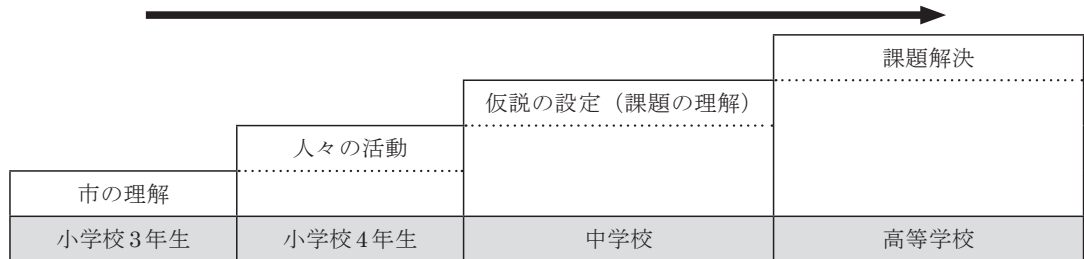


図1 地域学習の系統性（金子ほか2022）

理解主義的な地域学習から脱するには、主題として生徒が仮説を設定すべきだろう。仮説に基づく主題を設定すれば、調査を行うという小学校との違いが明確化する。さらに、中学校段階で仮説を設定するとともに地域の課題を理解し、さらに実際に行われている課題解決に向けた取り組みを高等学校で理解するという学習活動にも繋がる（図1）。

金子ほか（2022）で示したこれらの系統性を基に、地域学習の特質と課題点について次節で考察する。

2.3 中学校社会科地理的分野の特質と課題習方法の検討

金子ほか（2022）は、地域学習の特質に対する課題を以下のように示した。

①調査などに基づく地理的な地域理解が小学校段階で行われたことを受け、中学校ではその学習を発展させ、地域の課題を理解し仮説を検証するために調査を行うという学習が望まれる。さらに、理解（考察）することで終わらず、仮説の検証結果として単元末ではまとめた内容を発表する場の設定が欠かせない。

②生徒や班独自の調査・まとめとなり、双方向的なやり取りが行われない。生徒にとって身近な地域を取り扱うため「自分ごと」として捉えやすい一方、「中学生として」など全員が同じ立場で考えてしまいがちでもある。高齢者がどこへどう避難するかという立場に立つことは難しい。つまり、「中学生」など一面的な視点からの学習になってしまう。

それに対して、課題を克服するために、3点を地域学習に取り入れる必要性を述べた。

①小中高の関連性を踏まえた地域学習で身に付けるべき資質・能力の整理である。ここでは、静態地誌的に市について理解した小学校での学習と課題解決に向けた学習を組織している高等学校での学習の間を取り持つ中学校社会科地理的分野として、仮説の設定を行いそれを検証する中で地域の課題に対する理解を深めていくこととする。

②生徒が双方向的なやり取りを行う学習活動を組織することである。ここでは、単元末に生徒が仮説の検証結果を発表するための学習活動を組織し、質問・反論を通して双方向的なやり取りが行われるように促す。

③生徒の双方向的なやり取りを行うために、多角的に考察する学習活動を組織することである。先に挙げたように、高齢者やペット連れの住民など中学生以外の様々な立場を設定し、地域の課

題に対する討論会などを組織することで多面的・多角的に地域学習を行う。

金子ほか（2022）で示されたこれらの地域学習の特質と課題を基に，本研究では中学校社会科地理的分野で防災を視点に地域学習の授業開発・実践を行った。

Ⅲ. 授業開発・実践

本章では，勤務校周辺の地域環境を踏まえた授業開発を行う。特に，地域学習のテーマとして取りあげられる自然環境や防災対策を中心に説明し，地域学習の授業開発モデルを示す。

3.1 単元について

単元名 「身近な地域」 大項目 C 日本の様々な地域」の「(1) 地域調査の手法」に対応

単元の目標

- (1) 観察や地図の読み取りなどの地理的技能を身に付け，対象地域の災害対策の現状について理解する。
- (2) 地域調査において，対象となる場所の特徴などに着目して，適切な主題や調査，まとめとなるように，調査の手法やその結果を多面的・多角的に考察し，表現する。
- (3) 地域調査を通じて，よりよい社会の実現を視野に地域で見られる課題を，主体的に追究しようとする態度を養う。

3.2 指導計画（全7時間）

次	学習内容	◎学習課題・学習活動	評価基準〔評価方法〕 ○:評定に用いる評価 ●:学習改善につなげる評価
1	日本の気候の特色や地域による違いを理解する。	◎災害について理解しよう ・災害とはどのようなもので，なぜ起こるのか，ハザードマップを用いて考察する。 ・災害に向けてどのような対策が考えられるか理解する。	○さまざまな自然災害について理解できたか。 〔ワークシート・定期考査〕
	日本で発生する自然災害への対策を考察する。	◎災害のリスクやその対策を考察する。 ・地形図から，災害が起こるリスクを学校周辺で考察する。 ・質問項目を再考し，専門家に聞いておくべきポイントを整理する。	○地理的技能を用いて調査できたか。 〔ワークシート・定期考査〕
2	学校周辺の地理的環境から，適切な調査テーマを設定する。	◎調査テーマを考えよう。 ・学校周辺の地理的環境を思い返す。 ・災害に対する資料を踏まえ，学習課題を考える。	●地域の課題を踏まえた調査テーマとなっているか。 〔発言・ポートフォリオ〕
3	調査テーマから，調査する資	◎単元での学習課題を追究するために，何をどう調べるべきか考えよう。	●調査が可能で，仮説の検証につながるか。

	料や内容を考察する。 調査を行い、発表資料を作成する。 プレ発表を行い、様々な人の視点から再考する。	・災害に対して住民が安心できる説明をする。 ・何を調査する必要があるか考える。 ・調査すべきポイントを絞る。 ◎専門家から実際に災害のリスクとその対策について聞こう。 ・専門家に事前に集めた質問について答えてもらい、理解を深める。 ・質問を通して、学習課題に対する意見を構想する。 ◎要配慮者等の立場から、災害を捉えよう。 ・災害対策において配慮すべき人を理解する。	[発表資料・ポートフォリオ] ●仮説の検証に向けて調査できたか。 [感想シート] ●地域の課題を踏まえ、災害に対して多面的・多角的に考察しているか。 [発表資料・ポートフォリオ]
4	地域の課題を踏まえて地図やグラフを参考に説明する。	◎学習課題に対するまとめを行い、発表しよう。 ・学習成果を基に、災害に対する意見をまとめる。 ※立場例) 区役所職員・高齢者・未就学児家庭・ペットを飼っている住民・高台に住む住民。 ・多面的・多角的に災害対策に関する疑問点や課題を議論する。	○地域の課題を踏まえ、災害に対して多面的・多角的に考察し表現できているか。 [発表・ポートフォリオ] ○よりよい社会の実現に向け、地域の課題を主体的に追究しているか。 [発表・ポートフォリオ]

Ⅳ. 考 察

4.1 生徒のアンケート結果

本単元の学習前と学習後で、同じ文言のアンケートを実施し、その変容を考察した。

Q1 中野区の防災について知っていますか？

	学習前	学習後
A：よく知っている「自分のこととしてとらえ、何ができるか考えている。」	2.2%	30.8%
B：知っている「その課題について、説明することができる。」	8.1%	60.7%
C：あまり知らない「その課題について、聞いたことがある。」	65.4%	7.7%
D：知らない「聞いたことがない。」	24.3%	0.8%

Q1では、学校区のある市区町村の防災に関する質問を行った。小学校4年生では、人々の災害に対する活動や災害に対しての対処や備えについて学習している。時間が空いているため、その場で思い出せずにC又はDを選択した生徒がいる可能性もあるが、それでも学習前は非常に低い割合だった。しかし、学習後は、全体的に認識が高まったと感じている生徒が増えている。特に、

Aの回答が増えていることから、生徒自身が地域に対して主体的に追究しようとする態度が育っていると考えられる。

Q2 中野区（特にこの学校の校区）は、「災害に強い町（しっかり対策ができている町）」と思いますか？

	学習前	学習後
A：非常にそう思う	2.9%	5.1%
B：そう思う	47.8%	65.9%
C：そう思わない	40.5%	23.9%
D：全く思わない	8.8%	5.1%

Q2 では、生徒の地域への防災に対する印象を明らかにした。学習前は、半分程度の生徒のみが災害に強い町という認識をもっていたことが分かるが、学習後は7割程度までその割合が高まった。しかし、他の回答と比べてあまり伸びが少ないのは、後述する生徒の発表でも災害のリスクが高い地域であることを改めて認識したためとも考えられる。つまり、学習を経て、「災害への対策はなされているが強い町とはいえない」という認識を改めてもったと考えられる。

Q3 あなたは、災害時の人権的配慮についての関心や理解は高いですか？

	学習前	学習後
A：大変高い	4.4%	9.4%
B：高いと思う	27.2%	56.4%
C：あまり高くないと思う	56.6%	29.9%
D：高くない	11.0%	1.7%
E：その他（自由記述）	0.8%	2.6%

Q3 では、災害時の人権的配慮に対する認識を質問した。こちらは、倍以上の割合で「高い」と感じる生徒の割合が増加したことが分かる。特に後述するが「障害者」や「高齢者」といったことをテーマに学習を進めた班もあり、多面的・多角的に地域の実態を考察し、学習したことが分かる。自由記述では、「授業を受けて高くなった」という肯定的な意見の一方、「無い」など高まった様子が見られない生徒もいた。

4.2 生徒の疑問と発表

4.1で示した学習前のアンケートに合わせて、生徒から「疑問」と「調査テーマの案」を集めた。主なものは以下である。

<生徒が出した疑問とテーマ>

- 1 介護施設の人たちはどう逃げるのか
- 2 人の助けがないと身動きが取れない人はどうすればいいのか
- 3 家族に重い病気を持っている人がいて、避難場所に行けない人はどうすればいいか

- 4 障害のある人に配慮した設備があるのか？
- 5 日本語がわからない外国人の方がいたらどう接すればいいのか
- 6 洪水などが起きた時に、どう避難（歩き・自転車・車・公共交通機関など）すればいいのですか？
- 7 中野区（特に若宮など）は道が狭く消防車が入れないと聞いたのですが、火災の場合どうするのですか？
- 8 避難する基準。地震だったら揺れが大きかったらすぐに避難するのか、家が暮らせる状態だったら避難しなくてもいいのか？
- 9 災害が起きて家に籠るのは安全ですか？
- 10 どうして大雨の避難所が、いずれも川が中に通ってる中野工業高校と明和中なのか
- 11 なぜ広いところ（学校など）に避難するのか？
- 12 なんで学校の前や敷地内に川があるのに避難場所に指定されているのか？
- 13 学校などに避難した後、どのような行動をするのか？
- 14 学校などの避難所に指定されている場所はどのような対策がされているのか？
- 15 近くの学校が川沿いであっても、台風などで河川が氾濫した時学校に逃げるのが正しいのか？
- 16 避難所のコロナ対策はどういうことをしているのでしょうか？
- 17 避難場所が家から遠い人はどうしているのですか？
- 18 非常食とかはどこに保管してあるのか？
- 19 周りの人達に迷惑をかけない為に避難所ではどのような過ごし方をすればいいか？
- 20 制限のある人数よりも多くの人が一つの場所に集まってしまう避難できない時、その人たちはどうなるのですか？
- 21 何が身の回りにあるといいですか
- 22 避難バックの中には何を入れるのがいいのですか？
- 23 中野区はどのような防災・災害対策をしているのですか？
- 24 災害後の一連の動作（自分達ができるべきこと）を知りたい
- 25 犬や猫などのペットをどうやって守ればいいですか？
- 26 金魚やカメなどを飼っている人はどこに避難できるのか
- 27 災害時には公園などに防災倉庫があるが誰が鍵を持っているのか？
- 28 避難所に逃げる人の順番（優先して入れる人）はありますか？
- 29 家族で決められた避難所に、家族がいない時どう言った対応をすればいいのか？
- 30 災害時、すぐに解決できそうに無いことで困っている人がいたら助けることか、避難することどちらを優先すべきか。
- 31 災害時に起こりそうな人権問題は何ですか？
- 32 中学生は、災害時何かできることがあるのか？手伝った時に邪魔にならないか？

生徒は、4や5など、外国人や障害者など、配慮が必要な人々に対する学習の必要性を感じていることが分かる。さらに、23や30など、公助・共助の視点から災害を捉えていることも分かる。しかし、先に示したアンケートからも、まだ人権的な配慮や理解に対してはあまり高い意識を持ち合わせていないことが分かる。

そして、生徒はこれらの疑問を基に、各班（5・6名）で発表を行った。以下はその構成の一例である（表2）。

表2 A班の生徒の発表構成

表紙	避難所について
目次	発表の全体構成
調査テーマ 仮説	・避難所がいっぱいだったらどうすればいいか？ ・大人数で別の避難所に移動する。
価値	もしも災害が起きた時に冷静な判断ができるようになる
調査結果	・避難所の説明 ・避難所の場所調査（地図を示して場所を提示） ・避難所についての疑問とその回答
仮説検証	避難現場での勝手な判断大きな危険が伴う 「大人数で移動する」という仮説は正しくなかったといえる。
まとめ	避難が必要になった時には、避難所の管理をしてくださる方の指示のもと、冷静な対応が大切である。くれぐれも自分勝手な判断をしないように！！

A班は、先に調査テーマとそのテーマを調べることにどのような価値があるか、そして仮説を設定し、発表準備を行った。そして、最後には仮説を検証しながら、調査結果をまとめた。A班では、避難所について調べるという抽象的なテーマをさらに絞り込み、「避難所がいっぱいだったらどうすればいいか？」というテーマを設定した。仮説としては、「大人数で別の避難所に移動する。」とし、調査を進めた。調査を進める中で、避難所の場所などを知ったり区役所の防災担当者に直接質問し、仮説が間違っていたことを認識したりした。最後に、自己判断の危険性に警鐘を鳴らす形でまとめた。さらに、発表後には質疑を設け、「避難指示をどういった方法で知るのがか」など、活発なやり取りが行われた。A班では、公助を軸に調査したように、他の班でも「災害に対してどのように備えたらよいか」や「災害時に中学生ができることは何か？」など、自助・共助・公助それぞれの在り方を再構築するような防災学習を行った。

V. 成果と課題

本研究は、市民性教育という観点から、小中高の関連を意識した地域学習を開発・実践し、その結果を考察した。生徒が「①理解（考察）で終わってしまう②双方向的なやり取りが行われな」といった課題に対して、「①仮説の設定を行う②発表と質疑という形で双方向的なやり取りを行う③人権配慮を視点にすることで多面的・多角的に考察する」という学習活動を組織した。アンケートから、生徒自身は防災について認識を深めたこと、人権を視点にしたことで様々な人への配慮や理解に対する認識を深めたことが分かった。今後は、中学校社会科の中で「地域の在り方」とどのように関連させるのか、そしてアンケート以外にテスト等で認識の深まりを見取る必要がある。

付記

本稿は、金子が大学院連合教職実践研究科で行った研究をもとに、授業開発・実践に取り組ん

だものである。東との共同研究のうち、授業の実施と考察を中心に金子がまとめた。

引用・参考文献

- 秋本弘章(2020)「新科目『地理総合』に関する一考察—内容と評価問題について—」『環境共生研究』13, pp. 49-58.
- 井上昌善ほか(2018)「『公正』さの判断基準の構築を目指す震災学習の授業構成：中学校社会科公民的分野『震災復興の問題について考えよう』を事例として」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』167, pp21-30
- 紙田路子(2021)「市民的資質・能力を育成する防災教育の在り方：小学校第6学年社会科単元『水害から考える地域の防災』の設計を通して」社会系教科教育学研究, 33, pp1-10.
- 金子遥(2021a)「公民的資質の育成を目指す社会科学習活動の一考察—資質・能力の三つの柱の統合的育成を目指して—」『京都教育大学大学院連合教職実践研究科授業力高度化コース修了論文』令和2年度, pp. 227-236.
- 金子遥(2021b)「メタ認知による抽象化の社会科授業開発—「日本の選挙制度」を例に—」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』3, pp. 227-236.
- 金子遥・田中曜次(2022)「環境を視点とした地域教材の開発—小中高の関連を踏まえた地域教材授業開発—」京都教育大学 環境教育研究年報, 30, pp. 41-50.
- 小谷恵津子(2020)「認識および表現の媒体としての機能に着目した地図活用による小学校社会科防災学習における学びの深まり」, 社会系教科教育学研究, 32, pp11-20
- 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編」
- 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編」
- 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」
- 七木田俊ほか(2022)「中学校社会科地理的分野における防災学習に関する検討」教育実践研究論文集, 9, pp91-96.
- 植田真夕子(2015)「社会に開かれた教育課程の実現をめざした社会科授業の開発—小学校第4学年『自然災害から人々を守る』を事例に—」『日本教科教育学会誌』第37巻, 4, pp111-116
- 心理学・教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同高校地理歴史科教育に関する分科会(提言)「新しい高校地理・歴史教育の創造—グローバル化に対応した時空間認識の育成—」2011年8月3日, <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t130-2.pdf> (閲覧日:2022年11月10日)
- 山崎憲治(2016)「復興の鍵となる災害学習—レジリエントな社会創りに向けて—」『社会科教育研究』No. 127,